共同研究事例紹介

大学をもっと身近に感じていただき、共同研究を有効に活用していただくために、現在取り組んでいる２つの事例を紹介いたします。会員企業・担当教授・コーディネーターに共同研究に対する思いをお伺いしました。

セト電子工業株式会社

電子機器製造
射水市　（旧 小杉町）

大学は ビジネスパートナー

セト電子工業㈱
南雲社長

富山県立大学との出会いは10年ほど前に遡ります。小杉町の企業と大学の交流イベントにパネラーとして参加させていただいたのがきっかけです。その時は、「共同研究」などは考えておりませんでした。

しかし、それから数年後、研究課題にあたってしまったことがありました。そこで思い当たったのは、交流会で知り合った岡田先生だったのです。突然の訪問にもかかわらず、先生は丁寧にご対応くださいました。

あの時小杉町の交流会に参加していなかったら、岡田先生のことは知る由もありませんでしたし、「県立大学に相談する」という発想は私の中には芽生えなかったと思います。

大事なのは『出会うこと』であると思います。何かテーマができてから先生を探し相談するのではなく、日ごろから色々な方々と出会う機会を自分から積極的に持つことが大事であると私は考えております。私は、研究協力会の催しなどには自分の分野と全く関係ないテーマでもできる限り参加するようにしています。そのおかげで、食品分野の先生と知り合うこともでき、そこから新たな研究テーマに取り組むこともできました。

現在では、県立大学は弊社にとってビジネスパートナーです。21世紀を生きていく上で切り離せない存在であると考えております。大学は様々な視点から問題を捉えて下さり、解決へと導いてくれます。しかし、大事なのは大学はあくまで切り口を見つけて下さるのであり、最終的に解決するのは自分たちであるという姿勢です。すべてを任せてしまっては企業の意味がありません。この姿勢だけは今後も大事にしていこうと思います。

大学は 企業のホームドクター

工学部電子情報工学科
岡田教授

研究開発で大事なのは長年の『蓄積』だと思います。今行う研究がすぐに役に立たなくとも、必ず数年後に役立つ時が来ると考えます。大学にはそういった蓄積された研究が多くあります。いわば、役に立つことを待っている技術という名の特効薬のようなものです。企業の方々には、ぜひそれを利用してほしいのです。

私は、身近なホームドクターでありたいと考えています。企業が技術的な問題という風邪を引いたときに気軽に相談できる先生のようなイメージでしょうか。もちろん専門外の病気（問題）もあります。そんなときのために、先生同士のネットワークが重要であると思います。もちろん大きな病院のような総合大学にはトータルでサポートできる体制があるのかもしれません。しかし、地元の病院の先生のような気軽さには欠けます。「地域医療」のように、県立大学を気軽に利用して頂きたいと思います。

大企業×大学から 企業×企業へ

地域連携センター
定村コーディネーター

セト電子工業様と岡田教授はお付き合いが長いこともあり、すばらしい関係を築かれていると思います。お互いのベクトルが一致していることが成功要因ですね。こういった関係の連携には私たちは大いに注目しております。

県立大学にはすばらしい先生が多くいらっしゃいます。企業の方々に先生方をもっと知っていただきたいと考えています。そんな関係の中からいつか協力会会員同士の企業が結びつき、新たなビジネスが創造されればすばらしいと思います。近い将来そんなコーディネートが実現すると信じております。

共同研究事例紹介

株式会社米田

食料品製造販売
射水市（旧 新湊市）

食文化の共有

㈱米田　米田社長

富山県立大学とのお付き合いは２年近くになります。ある食品を粉末にしたかったのですが、上手くいかず、先生に相談させていただいたのがきっかけです。私が悩んでいたことが嘘のようにすぐに解決してくださったのが印象的でした。

葭田先生とお会いしてから、大学の印象が大きく変化しました。近づきにくいイメージを持っていたのですが、良い意味で学校の先生らしくない葭田先生の気さくな対応を通じて、今では会社の顧問のようなイメージを持っています。研究だけではなく、商品を売ることも一緒に考える関係になれるとは思ってもいませんでした。前に進むのが早く、心強く感じております。

富山県にはすばらしい食材が豊富にあります。白えびやズワイガニなど、どれも他県ではなかなか食べる文化が無いものが多いです。その研究を進めることは、同じ食文化を共有できる地元の大学でしかできないことだと感じております。今後も大学とアイデアや情報を共有しながら、長いお付き合いをしていきたいです。

食育

短期大学部生物資源学科
葭田教授

企業との共同研究は学生にとってもいい影響を与えます。通常の学術論文とは違い、研究の成果が商品の販売となって現れることがあります。自分の携わった商品が市場で販売されることは、非常にすばらしい経験になるのではないでしょうか。また、就職の際もその経験が役に立つことが多いようです。

私は食に関しての研究を進める上で、「いかに商品を早く完成させるか」ということを一番に考えております。商品という出口を早く見つけた上で、研究を通してそれに対する科学的な付加価値をつける。そしてほかの商品との差別化を行うことが食品研究において重要なことであると思います。新しい商品を開発することはそんなに難しいことではありません。私たちは商品の元となる「素材」を提供していただければ、それをどう食品として完成させるかということを考えます。それが自然と新しい商品となるものなのです。

食に対する研究を進めることはただ「売れる商品」を開発するということではありません。私の研究の中では常に人に対していい影響を与える機能性を持った物質を見出し、その効果を高めることをテーマにしております。これから高齢化社会を迎える上で、食を通して健康を維持することは、老人介護問題、老人医療問題、ひいてはそれに関わる医療費削減問題にも発展する重要なことです。そのような位置づけで食品研究を考えると「食育」はもっと重視されなければなりません。平成時代の「医食同源」について産学官が共に考える必要があります。

ブランド作り

地域連携センター
中島コーディネーター

大学との共同研究というと、難しい測定評価や食品ならマウスを使った実験などを思い浮かべる方もいらっしゃると思います。しかし、米田社長と葭田先生の共同研究は、他大学ではなかなか見られないスタイルです。研究というよりは、商品開発実践のようなイメージです。商品の名前や売り方なども先生と一緒に考えています。もちろん研究もしっかり行っています。商品作りは、素材の機能性を活かした特徴のあるものになっています。

今後、こういった商品作りを進めるにあたり、富山県立大学ブランドが確立されればすばらしいと思います。試食なども学生にモニターとして協力してもらい、スピーディーに幅広く評価が行えるようになれば大学発ブランドの商品開発へも役に立てるのではないかと考えています。共同研究会の幅を広げていく上でも、今後大学発ブランドの「売れる商品作り」に積極的に関与していきたいと考えています。